

目標や方針・プロジェクトに関連する意見

■全般

- ・今回の調査に終わらず、長く役立つものに
- ・社会資本整備や経済発展との両立
- ・吉野川をグリーンインフラとして位置づけての検討
- ・自然と共生する地域や社会の形成に幅広く役立つものに
- ・自然からの恵み（生態系サービス）についての意識向上につながるものに
- ・吉野川流域の風景がいつまでも県民の心象風景となるように
- ・流域の人々が誇りに思える生態系ネットワークに
- ・河口干潟のラムサール条約登録湿地への指定につながるものに
- ・河口干潟にシギ・チドリ類が群れているような川に
- ・おいしいアユがとれる川に
- ・「景色としての吉野川」以外の関心の向上

■産業との関わりを活かす

- ・漁業者とうまく連携・調整ができるように
- ・地場産業とのつながるものに
- ・流域の人々の暮らしや経済にとけこんだものに
- ・山・川・野・海・個人・生業のネットワークを
- ・スジアオノリ、シジミ、鳴門ワカメ等の吉野川を特徴づける生業を活かす（スジアオノリは築地での評価は四万十川産のものより高い。鳴門ワカメも生育に吉野川の水が関係）

■吉野川のすばらしさを発信する

- ・四万十川よりもきれいな四国一の清流として国内外に情報発信
- ・吉野川河口部は、関西圏の県庁所在の河川としては、最も生物多様性が高いということをアピールする
- ・吉野川のブランド化
- ・吉野川のもつ「力」の発信
- ・吉野川への興味が湧くような「キャッチフレーズ」を考える

■流域の文化や暮らしを活かす

- ・流域のほとんどの学校で校歌に歌われる吉野川
- ・遊び場としての吉野川
- ・自然的・文化的な価値を持つ竹林の保全
- ・善入寺島の旧遍路道をシンボルとしたアピール
- ・わかりやすい生態系サービスとして、シラスウナギ漁やニホンウナギ、ジンゾクたらいうどん等の食文化を活用
- ・ウナギを対象に

■人と自然との関わりを高める

- ・エコツアー、スタディツアーの実施
- ・子どもたちへの川で遊ぶ機会の提供
- ・水辺の楽校との連携
- ・人が集う拠点づくり
- ・自然を理解し、自然を大切にする環境教育の反映
- ・河川の学習の場として活用
- ・学校での環境教育の一貫として吉野川を活用する仕組みづくり
- ・子どもたちがリーダーとなって川に戻ってくるような仕組みづくり
- ・人材育成プログラムの作成と生物多様性リーダーの育成
- ・誰もが流域の自然情報にアクセスできるしくみづくり
- ・「吉野川アダプトプログラム」との連動

■人や組織の連携・協働の推進

- ・生態系ネットワークづくりを通じた地域間の連携
- ・吉野川に関わる人と組織の連携体制づくり
- ・多様な主体の自発的な活動による連携体制づくり
- ・民間企業のCSR活動との連携

検討の対象に関連する意見

■対象とする場所

- ・徳島県外の吉野川流域も検討の対象に
- ・河口周辺も検討の対象に
- ・堤外地だけではなく堤内地でも生態系ネットワークが進むように

■対象とする内容

- ・山地の間伐などについても検討の対象に
- ・河川の水量調節、水利権についても検討の対象に

生きものや自然環境に関する意見

■鳥類

- ・シギ・チドリ類（吉野川には本物の干潟があると近畿圏の方がうらやましがっている）
- ・ナベヅル等のツル類（ツル類の越冬地の分散化計画が国で検討されている。日本で一番大きな中州である吉野川の善入寺島はねぐらの適地）
- ・アオサギ・シラサギ（河畔林がねぐらとして使えなくなり、山のほうに移動）
- ・カワウ（脇町の拝原が近畿圏で最大のねぐら）
- ・マガン・ヒシクイ等のガン類（近年、越冬が西日本にも拡大。北から西に向けた広域的なネットワークの指標種として）
- ・コチドリ、コアジサシ
- ・ミサゴ
- ・オオヨシキリ

■魚類・甲殻類

- ・アユ（漁期には多くの県外客）
- ・アユカケ（川のつながりを評価する上では便利な魚）
- ・サツキマス（注目を受けやすい）
- ・カジカ（一昨年、支川の鮎喰川で40年ぶりに生息を確認）
- ・ウナギ（近年なかなかとれない、寝床づくり：護岸の自然再生、内水面漁業や食文化の継承）
- ・干潟性のハゼ科魚類
- ・シオマネキ
- ・カワヨシノボリなど（ジンゾクと呼ばれ、流域の食文化と関係、砂防ダムに堆積した砂礫の除去、地域の自然再生と文化の継承、自然再生活動と観光産業の融合）

■哺乳類

- ・カヤネズミ

■昆虫類

- ・ルイスハンミョウ（吉野川の河口の中州に生息している昆虫で、生息地は日本で4か所のみ）

■植物

- ・マイヅルテンナンショウ（主に管理された竹林に生育し、県内では絶滅したと思われたが再発見）
- ・ヤナギ類（河畔林を構成する在来の樹木だが、大きくなり河川管理上問題に）
- ・スジアオノリ
- ・イセウキヤガラ

■外来生物（負の問題として）

- ・ブラックバス
- ・アライグマ
- ・ナガエツルノゲイトウ
- ・アレチウリ
- ・セイバンモロコシ
- ・シナダレスズメガヤ

■自然環境

- ・干潟
- ・ヨシ原
- ・イセウキヤガラ等の水生植物が生息する藻場
- ・シオマネキが生息する汽水域のエコトーン
- ・カモの猟場としても使われる第十堰
- ・コチドリ・コアジサシのための礫河原
- ・マイヅルテンナンショウが生育する竹林

■流域の自然環境

- ・健全な河床をもつ水路・河川
- ・川～水路～水田の繋がった環境
- ・西日本最大の産地である吉野川周辺のハス田
- ・阿讃山麓の里山の自然

準備会で意見をいただいた生きもの

【希少種の凡例】

環境省レッドリストに掲載 ●

徳島県レッドリストに掲載 ●

国際希少野生動植物種に指定 ●

※注記のない写真は徳島河川国道事務所 web ページ「吉野川の生き物図鑑」より引用

■鳥類

○シギ・チドリ類



(ハマシギ)



(シロチドリ)

特 徴	日本で繁殖や越冬をする種も一部いるが、多くの種は、春と秋の渡りの時期に、繁殖地と越冬地の間を移動する途中で日本に飛来する。
生息環境	干潟や河口などの湿地、河原
食べもの	ゴカイ、ミミズ、貝など
備 考	<ul style="list-style-type: none"> ・吉野川流域では、冬に右岸河口域の干潟や砂州、人の出入りの少ない砂地や石がゴロゴロした河原、ハス田などで見られる。 ・渡りをする種類は数千~1万キロにも及ぶ距離を移動するため、越冬地、繁殖地、渡りの中継地を保護することが重要。そのため、生息地を保護する国際的な取組が必要であり、吉野川河口も生息地保護のネットワークに参加している。 ・生息適地の減少により、シロチドリをはじめ、希少種に指定されている種も多い(●●)。

○ツル類 (ナベヅル) ●●●



※写真:阿波市上池地区に飛来した様子を示した看板を撮影したもの

特 徴	世界的に生息数が少なく、その大部分が冬鳥として日本へ飛来し、越冬する。徳島県への飛来はまれである。水田などでエサを採り、広いヨシ原などをねぐらとする。
生息環境	水田、河川の湿地帯など
食べもの	植物の根、昆虫、カエルなど
備 考	<ul style="list-style-type: none"> ・日本では、鹿児島県出水市が最大の飛来地となっているが、感染症が発生した場合の種の絶滅のリスクを分散させるため、新たな越冬地づくりを進める方法が環境省で検討されている。 ・吉野川流域では、善入寺島でねぐらを取り、阿波市の農耕地等で餌をとる様子が確認されている。ただし、長期間の滞在例は少ない。 ・平成 26 年 2 月、ソデグロヅルが鳴門市のハス田に初めて飛来した。 ・小松島市では、ナベヅルの飛来地でとれたお米を「ツルをよぶお米」としてブランド化した商品が販売されている。

○サギ類



(アオサギ)



(コサギ)

特 徴	くちばしと足が長く、浅い水辺でエサをとる。アオサギ、コサギ、ダイサギなどは一緒にコロニー(集団繁殖地)をつくる。一年中日本で見られる種類が多い。
生息環境	沼、水田、干潟、河川敷など
食べもの	魚、エビ・カニ、カエル類など
備 考	<ul style="list-style-type: none"> ・吉野川流域では、全域で見られる。 ・中流域の竹林でサギ類のコロニーが確認されている。 ・夏鳥として渡ってくるチュウサギは希少種に指定されている(●●)。

○カワウ



特 徴	水辺の近くの林に繁殖とねぐらを兼ねたコロニーをつくる。水中に潜って魚を捕る。行動範囲は広く、数 10km 離れたところに集団で採食に行くこともある。
生息環境	海岸や河川、湖沼など
食べもの	魚
備 考	<ul style="list-style-type: none"> ・吉野川流域では、全域で見られる。 ・徳島県では平成 2 年頃から個体数が増え、放流されたアユなどの食害が問題となり、平成 19 年にカワウ食害防止対策マニュアルが作成されている。

○コアジサシ ●●●



特 徴	日本には夏鳥として渡ってくる。石がゴロゴロした河原や中州にコロニー(集団繁殖地)を作って繁殖するが、河川の環境の変化によって数が減っている。
生息環境	草がまばらな河川敷、中州の砂礫地
食べもの	魚、エビなど
備 考	<ul style="list-style-type: none"> ・吉野川流域では、夏場に河口域や流れの緩やかな下流域で見られる。 ・平成 22 年に出された徳島県版レッドリストによると、過去 10 年で 50%以上、個体数が減少したとされる。

○ミサゴ ●●



特 徴	トビくらいの大きさのタカの仲間。海岸の崖地や大きな木に巣をつくる。
生 息 環 境	大きな川の下流域や海岸
食 べ も の	魚
備 考	・吉野川流域では、河口域や第十堰周辺で魚を取る姿が良く見られる。

○オオヨシキリ



特 徴	夏鳥として九州から北の地域にやってきて繁殖し、越冬のために南へ渡る。オスは「ギョギョシ、ギョギョシ」とさえずる。
生 息 環 境	広いヨシ原
食 べ も の	主に昆虫類
備 考	・吉野川流域では、主に中下流域のヨシ原で見られる。

○ガン類 (マガン、ヒシクイ) ●



特 徴	冬鳥としてシベリア東部などから主に北日本に飛来する。代表的なマガンは、翼を広げると1.4mほどになる大型の鳥。かつては狩猟の対象であり、一時期個体数が減少したが、その後天然記念物に指定されるなどの保護が行われ、飛来数が増えている。湖や沼、池などをねぐらとし、水田で落ち穂や草の種子などを食べる。
生 息 環 境	湿地や水辺
食 べ も の	植物の根茎や穀物など
備 考	・徳島県内では、1960年代ごろまで狩猟の記録がある。 ・吉野川流域での飛来数は限られ、近年では、藍住町と上板町との町境付近でマガンが、吉野川河口部でコクガンが確認されている。

※写真：(公財) 日本生態系協会 提供

■魚類・甲殻類

○アユ



特 徴	海と川を行き来する回遊魚。春から秋にかけての若アユから成魚の頃には川の中流域で過ごすが、秋に産卵して、ふ化した稚魚は海に下る。沿岸部で冬を過ごした稚魚は春になると川を上る。
生 息 環 境	連続性(海~河川)が確保された河川
食 べ も の	石に付着する藻
備 考	・吉野川では広範囲に生息しており、下流~上流域で見られるが、昔に比べて生息範囲は狭くなっている。 ・吉野川流域では、アユの姿寿司等の食文化がある。

○アユカケ (カマキリ) ●●



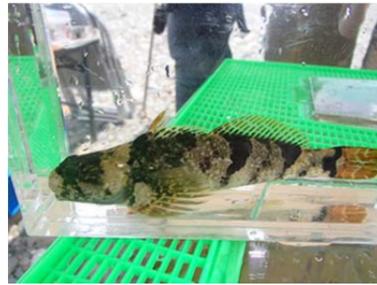
特 徴	海と川を行き来する回遊魚。冬に沿岸で産卵し、卵は孵化するまでオスが保護する。春になると川を遡上する。アユに比べ遊泳能力が劣るとされる。
生 息 環 境	連続性(海~河川)が確保された河川、主に川の中流域の瀬
食 べ も の	アユなどの魚
備 考	・吉野川流域では、昭和30年代頃までは中流域の池田町や川島町まで遡上していたが、現在ではほとんどの個体は第十堰直下に溜まっており、ごくわずかの個体が柿原堰下に達することができる程度のものである(徳島県レッドデータブック)。

○サツキマス (アマゴ降海型) ●●



特 徴	海と川を行き来する回遊魚。サケの仲間で、秋になると上流域で産卵し、ふ化した稚魚は川を下りながら成長する。翌年の冬には海に出て沿岸部で過ごし、1~2年で成熟し春に川を上る。
生 息 環 境	連続性(海~河川)が確保された餌資源が豊富な河川
食 べ も の	河川では水生昆虫等、海では小魚やプランクトン
備 考	・生息数は全国的に減少。吉野川流域でも確認されるが、稀に見られる程度である。

○カジカ ●●



特 徴	海と川を行き来する回遊魚。1月から3月にかけて産卵し、ふ化した稚魚は海に下り、1~2ヶ月過ぎ後、川を上る。
生息環境	連続性（海～河川）が確保された河川 ※産卵に適した礫質の川底が残っていること
食べもの	水生昆虫や小魚など
備 考	・アユカケ同様、堰堤等で遡上が阻害されやすく、現在、吉野川流域では殆ど絶滅状態である。 ・2013年、吉野川水系鮎喰川で40年ぶりに確認された。

※写真: 徳島河川国道事務所インフォメーションより引用

http://www.skr.mlit.go.jp/tokushima/info/archives/2013/07/entry_398.html

○ウナギ ●●



特 徴	海と川を行き来する回遊魚。海のはるか沖合いで産卵するが、その時期や場所は不明な点が多い。稚魚は川をさかのぼり、成長すると川の中流から上流、池や沼で見られる。
生息環境	連続性（海～河川）が確保された河川
食べもの	水生昆虫、小魚、貝、エビ等、カエルなど
備 考	・吉野川流域では下流～上流域で見られるが、減少している。平成26年度に徳島県のレッドリストに掲載された。 ・国際自然保護連合（IUCN）が発行するレッドリストにも掲載されており、世界的に減少が問題視されている。

○干潟性のハゼ科魚類（トビハゼ）



特 徴	泥の上をはい回ったりジャンプしたりするユニークな魚。夏は干潟の上で活発に活動し、冬は干潟に掘った巣穴でじっとしている。
生息環境	河口の干潟
食べもの	ゴカイや底生動物などの小動物
備 考	・干潟そのものが減少しているため、希少種に指定されている種も多い。 例) トビハゼ、タビラクチ (●●)

○カワヨシノボリ（ジンゾク）



特 徴	川の淵から平瀬にかけて、緩やかな流れのところにすむ。一生を川で過ごす。
生息環境	川の上流から中流
食べもの	水生昆虫、石に付着した藻など
備 考	・吉野川流域では、中流～上流域、支流などで見られる。 ・宮川内谷川周辺ではカワヨシノボリなどのヨシノボリ類を「ジンゾク」と呼び、出汁にしてたらいうどんを食べる文化がある。ただし、平成26年現在、ジンゾクでとった出汁を使用している店は1軒のみとなっている。

○シオマネキ ●●



特 徴	河口のヨシ原などに生息する。めったに水が上がってこない少し固めの地面に巣穴をほって生活している。オスのハサミは左右どちらかが極端に大きくなっている。
生息環境	河口のヨシ原など
食べもの	砂泥中のプランクトンなど
備 考	・吉野川河口の干潟には、本種の他にハクセンシオマネキやアシハラガニ、ヤマトオサガニなどのカニ類が生活している。

■哺乳類

○カヤネズミ



特 徴	体重7~14gの日本では一番小さなネズミ。ネズミ自体を見ることは難しいが、夏から秋にかけてススキやチガヤなどの草原を気をつけて観察すると、直径10cm程の球状の巣（球巣）を見つけることができる。
生息環境	川の周辺の草地や農耕地の周辺など
食べもの	植物や昆虫など
備 考	・吉野川流域では、ススキやチガヤなどが広く分布する河川敷で見られる。

■昆虫類

○ルイスハンミョウ ●●



特 徴	国内では5県だけに分布する希少な昆虫。幼虫も成虫も砂地の環境で過ごす。飛ぶことはできるが、1回の飛翔距離は不明。成虫の大きさは15~18mm。
生息環境	大きな河川の河口付近や砂浜
食べもの	砂浜にすむ小型の昆虫など
備 考	・吉野川流域では、河口干潟とマリンピア沖洲人工海浜のみに生息する。これらの2地点間では、個体が行き来している可能性があると考えられる。

■植物

○マイヅルテンナンショウ ●●



※写真：吉野川水系河川水辺の国勢調査（植物調査）平成17年度調査結果報告書より引用

特 徴	花と葉をツルが舞う姿に見立てて名付けられたサトイモ科の植物。花は5~6月に咲く。地下の球茎の一部が大きくなり、新たな芽を出す。
生息環境	低地の湿った草地や河畔林の林縁
備 考	・徳島県レッドリストでは、いったん「絶滅」とされていたが、平成17年度の河川水辺の国勢調査で生育が確認された（平成26年度の徳島県レッドリストの改訂で「絶滅」から「絶滅危惧IA類」へとランクが変更された）。

○ヤナギ類（アカメヤナギ）



特 徴	高さ10~20mになる落葉木。本州、四国、九州に分布。種子で繁殖する。
生息環境	平野部の大きな川沿いなどの水辺
備 考	・吉野川では第十堰の上流側~中流域まで広く河原、水際で見られる。 ・河道内で分布が広がっており、治水の面や生態系保全の面から、適切な管理が課題となっている。

○スジアオノリ



※写真：吉野川河口の養殖場

特 徴	食用とされる青のり類のなかで、もっとも香りが高く美味しいとされる。徳島県の養殖スジアオノリは、全国の生産量の7~8割を占め国内トップ。
生息環境	淡水と海水が混ざり合う汽水域
備 考	・吉野川の河口から8km程度までの区間で養殖が行われている。収穫時期は11月から1月の冬期がピークとなる。

○イセウキヤガラ ●



特 徴	全国に分布するが、特定の海に近い沼地や河川の湿地にしか生えないやや珍しい多年草の植物。株状に生える。
生息環境	潮の満ち干きで、水に浸かったり、浸からなかったりする感潮域
備 考	・吉野川流域では河口~第十堰の感潮域で局所的に見られる。